

マレーシア・マリアウ盆地における鳥類のウモウダニ相

○黒木知美(宮城県)・長堀正行(飼鳥野鳥病院)・田仲謙介(JICA 青年海外協力隊)

【はじめに】本研究は、マレーシア・マリアウ盆地に生息する鳥類のウモウダニ相を調査することを目的とする。1種類の鳥には通常、宿主に固有の寄生種と複宿主性の寄生種がみられ、複数種のウモウダニが寄生する(長堀, 2001)。そのため鳥類全体に調査が及べば、ウモウダニの種数は宿主の数以上に達すると推測される。現在既知種は約 2200 種であるが(Gaud and Atyeo, 1996), この数は予期される全体種数の 10~15%に過ぎない。海外では、1880 年から欧米やロシアにおいて、ウモウダニの種多様性研究がなされ、現在では鳥類の種分化や進化と平行したウモウダニ類の共進化を解明する先駆的な研究が行われている。しかし、アジア地域では欧米の研究者によるわずかな記録があるのみであり、特にマレーシアでは McClure *et. al.* (1973) による調査が行われて以来、ウモウダニ類の調査は行われていない。本研究は、サバ大学熱帯生物・保全研究所及びサバ財団が共同で主催する「マリアウ盆地科学遠征調査 2005」に、JICA (国際協力機構) が技術協力をを行い、ボルネオ生物多様性保全プログラムの一環として実施した。

【調査方法】調査は、2005 年 2 月 27 日から同年 3 月 10 日の間、マレーシアの奥地、サバ州南部マウリア盆地で実施した。鳥類標識調査はサバ州野生生物局と共同で実施し、捕獲された鳥類 29 種 65 個体について、ウモウダニ採取のために羽根採取を行った。羽根は1個体につき次列風切羽1枚を採取した。採取された羽根は実体顕微鏡で検鏡し、見出されたウモウダニ類は柄つき針で拾い、ホイヤー氏液(Krantz, 1978)でスライドガラスに封入した。ノマルスキー及び位相差顕微鏡を用い、200~1000 倍で形態観察を行った。

【結果と考察】ヒヨドリ科、チメドリ科、ツグミ科、ヒタキ科を含む 4 科 22 種の鳥類から Avenzoariidae, Proctophyllodidae, Trouessartiidae の 3 科 4 属 17 種のウモウダニ類が見出された。本研究と McClure *et. al.* (1973) が調査した鳥類のうち、重複する鳥類は 4 種であり、Orwing (1968) が調査した他 4 種を除くと、本研究により初めて調査された鳥類は 13 種であった。さらに、見出された 15 種のウモウダニ類は既知種とは異なる形質を持つため、未記載種と考えられる。

最も多くの鳥から採取された *Neodectes* sp.1 は、キバネヒヨドリ、ワキアカムジチメドリ、サビイロムジチメドリ、ズグロムジチメドリ、ヒゲチャイロチメドリ、コズアカチャイロチメドリ、セアカマルハシ、シラボシモリチメドリの、ヒヨドリ科とチメドリ科の 2 科 8 種から見出された。*Bicentralges longivasatus* はワキアカムジチメドリ、ムナジロムジチメドリ、サビイロムジチメドリ、コズアカチャイロチメドリ、セアカマルハシ、ハイガシラモリチメドリ、シラボシモリチメドリのチメドリ科 7 種に共通して見出され、本種はチメドリ科内に幅広く分布することがわかった。また、*Proctophyllodes stachyris* はこれまでジツグミ科の鳥類から見出されていたが(Atyeo and Braasch, 1966)、今回新たにシラボシモリチメドリ、アオメモリチメドリも宿主とすることがわかった。

なお、本研究は日本学術振興会・平成 17 年度科学研究費補助金(奨励研究)によった。